

池田文書の研究(64)(最終回)

池田謙齋の書簡及び官庁届等関連書類(2)

池田文書研究会

B 官庁届書類・履歴書

1 明治4年 月 日 (3447)

(表書) 池田謙齋旧幕府時代履歴書入

(この1行池田謙齋自筆)

養祖父池田淳作 津和野藩医師相勤申候

養父池田玄仲 士族 隠居

実祖父佐伯善左衛門 足守藩留守居相勤申候

実父緒方洪庵 奥医師相勤申候

賜地願中下谷生駒前久保丁住居

生国 武蔵 藤堂亀久雄触下

正七位 池田謙齋

未三十一歳

旧幕元高百俵外拾人扶持 御扶助高五拾俵

高現米拾三石

文久三甲子年十二月二日⁽¹⁾旧幕府之節、部屋住より長崎え医学伝習被申付、明治元戊辰年二月幕府、同年三月六日両番格屯所医師被申付、切米二百俵賜、同年九月九日御雇ヲ以病院医師試補被仰付、同年十一月四日病院医師被仰付、明治二己巳年三月十一日二等医学校医師病院掛り被仰付、同年五月十五日病院当直医官更ニ被仰付、同年七月廿七日任大助教宣下、同年十月十日従七位宣下、同年十二月廿五日養父玄仲願之通隠居被仰付、家督下賜、明治三庚午年四月十日兼任少典医宣下、同年六月十五日任少典医兼大学大助教宣下、同年潤十月廿三日普国え留学被仰付本官兼官被免、正七位宣下⁽²⁾ニ相成候

(1) 池田謙齋が長崎留学に出掛けたのは文久3年(癸亥)11月14日。

(2) 正7位宣下は明治3年6月15日。

(注) 表書を除く本文は池田玄仲筆。

2 明治5年 月 日 (3436)

高現米拾三石

宿所 下谷久保町二百拾七番 第五大区小三区

東京府貫属士族

池田秀之⁽¹⁾ 申 三十二

養父 池田秀真 同 五十三

養母 久 同 四十四

妻 照 同 十九

長男 池田秀一⁽²⁾ 同 三

養父秀真 次女 幾 同 十四

同人 三女 甲子 同 九

僕 久兵衛 同 四十

婢 はつ 同 二十

合 九人 [男四人/女五人]

右之通御坐候 池田秀之

留守中ニ付代印 池田秀真(印)

此分式枚可被差出候事

(1) 池田秀之は池田謙齋の別称。

(2) 池田秀一は翌年秀男に改名。

(注) 池田玄仲(秀真)は明治5年8月17日に53歳で死去(享年53)しており、代印の筆跡は池田家代理人味岡良政の筆と思われる。又最後の1行は味岡良政とは別筆。

3 明治6年8月12日 (3435)

東京府貫属士族 池田 源 秀之

謙齋

明治六年癸酉六月 三十二歳五ヶ月⁽¹⁾

明治元戊辰年三月六日

一、両番格屯所医師被申付候事

同年九月九日

一、御雇ヲ以病院医師試補被仰付候事

- 同年十一月四日
一、病院医師被仰付候事
明治二己巳年三月十一日
一、二等医学校医師病院掛り被仰付候事
同年五月十五日
一、病院当直医官吏ニ被仰付候事
同年七月廿七日
一、任大助教宣下
同年十月十日
一、従七位宣下
同年十二月廿五日
一、父玄仲願之通隠居家督下賜候事
明治三庚午年四月十日
一、兼任少典医宣下
同年^(ママ)六月
一、任少典医兼大学大助教宣下
同年閏十月廿三日
一、普国え留学被仰付本官兼官被免、^(ママ)正七位宣下ニ相成候事
右之通ニ御座候也

池田秀之留学ニ付留守心得父 隠居
池田秀^(ママ) 恵

明治六年八月十二日

此通式枚、右ニ付東京府戸籍掛え出ス

(注) 池田玄仲（多仲、秀真）は明治5年8月17日死去。代理人味岡良政の筆。

- 4 明治7年5月17日 (3439)
癸戌⁽¹⁾年五月十七日調
秀之 三十二才七ヶ月
ひさ 四十四才七月
いく 十五才三ヶ月
きね 十才一ヶ月
秀男 三才五ヶ月
浅草南午道 男 常吉母
婢 こま 四十七才九ヶ月

(1) 甲戌明治7年。

(注1) 池田謙齋の妻照（天留子）の名前がない。それは明治6年9月2日肺炎により死去した

為である。享年20。（1854-1873）

(注2) 留守代理人 味岡良政の筆と思われる。

- 5 明治9年5月15日 (3677)

秀之儀

普国留学被仰付有之候処、昨年中卒業、今般帰朝被相達候ニ付彼地発足、当十一日帰朝仕候、此段及御届候也

明治九年五月十五日 普国留学生 池田秀之
陸軍参謀局長 陸軍中将 鳥尾小弥太殿

- 6 明治9年5月17日 (3692)

(包紙) 通称相用候儀御届

謙齋儀

明治三年十一月^(ママ)普国留学被仰付渡航之節ニは通称実名併称候節ニ付、彼地在学中両様共相用居処、外国旅行證并ドクトル免證其地於普国致著述候書籍とも都て謙齋と相記有之候間、尔後実名秀之を相廢し、通称謙齋を相用候条、此段及御届候也

明治九年五月十七日 東京府士族 池田謙齋
陸軍参謀局長 陸軍中将 鳥尾小弥太殿

- 7 明治9年6月9日 (3453)

第四百七十号（ゴム印）

私義

明治三年十一月^(ママ)普国留学被仰付渡航候節は通称実名併称ニ付、彼地在学中両様ニも相用居候処、明治五年五月一人兩名不相成御達ニ付、急場之義故留守心得之者往復之暇無之ニ付、以存意実名ニ相定候得共、本月十一日帰朝以来甚以不都合有之、外国旅行證并ドクトル免證其他於普国致著述候書籍とも都て謙齋ト相記有之候間、尔後実名秀之ヲ相廢シ、通称謙齋ヲ相用候様仕度、此段奉願候也

明治九年五月廿日
第五大区小三区

御徒町壱丁目 五拾貳番地

正七位 士族 池田秀之（印）

東京府権知事 楠本正隆殿

願之趣聞届候事

明治九年六月九日

東京府権知事 楠本正隆 (印)

(上部に割り印あり)

(別紙)

私義
池田秀之留学留守心得居候処、去明治三年老人兩名不相成御達しニ付、当人へ往復仕度所存ニ候へとも、何分外国之事故日数相懸急場之義故、拙(者)存知にて実名ニ相定候処、今般帰朝仕、当人甚以不都合之由ニ付、無義前通称謙齋相用候様仕度義ニ付、拙者取究候義、何共奉恐入候へとも当人申通通称へ御引替被下置候様仕度、此段添て奉願候也

池田秀之留守心得 味岡良政 (印)

明治九年五月廿日

東京府権知事 楠本正隆殿

角印 ([東□□/□□□])

8 明治9年6月12日 (1663)

(端裏書) 池田秀真病死診断書

第一大区十三小区 浜町一丁目十三番地

士族 池田謙齋 秀之事改名願中

第壹大区十三小区 浜町壹丁目十番地

士族 池田秀之養父隠居

池田秀真

右長々肺小泡氣腫相煩居候処、追々本病相募り、今六月十二日病死仕候処相違無御座候也

第壹大区十三小区 浜町壹丁目十番地

士族 陸軍々医監 池田謙齋 (印)

秀之事改名願中

明治九子年六月十二日

(別紙)

御届

池田秀真

右私養父池田秀真久々病氣之処養生不相叶昨十二日午後二時死去仕候、忌服之義は左之通候間、此段御届申上候也

忌 三十日

服 百日

明治九年六月十三日

第一大区十三小区 浜町壹丁目十番地

陸軍々医監 池田謙齋 (印)

東京府権知事 楠本正隆殿

(注) 池田謙齋の養父池田玄仲は明治5年8月17日に死去しているが、今回正式に死亡届を出したものである。

9 明治9年6月 日 (3438)

父元旧幕臣緒方洪庵次男

天保十二辛丑年十一月朔日出生

武蔵国豊島郡第壹大区拾三小区

浜町壹丁目十番地住 士族 池田秀之

子 三十四歳八ヶ月

父元鹿児島藩左近允四郎左衛門長女

文政十二己丑年十月朔日出生

同人養母 ひさ

子 四十六歳九ヶ月

父元旧幕臣池田秀真次女

安政六己未年二月十七日出生

同人妻 いく

子 十七歳三ヶ月

父池田秀之長男

明治三庚午年十二月十三日出生

同人長男 池田秀男

子 五歳五ヶ月

父池田秀真三女

元治元甲子年四月二日出生

同人妹 甲子

子 十二歳一ヶ月

陸中国稗貫郡関口村 平民 小原長之丞三男

嘉永四辛亥年十月十三日出生

同人門人 小原 静⁽¹⁾

子 廿四年九ヶ月

美濃国加仁郡土田宿井之花村

農 長瀬儀右衛門長男

嘉永五子年二月出生

同人僕 長瀬熊吉

子 廿四歳四ヶ月

大阪府第四大区十六小区中之島三丁目十七番地

平民 安政五午年五月出生
 同断 粟谷安之助
 子 十八歳一ヶ月
 東京第五大区一小区浅草茅町一丁目二番地
 平民 平田寅吉娘
 安政三辰年十一月出生

同人婢 きた
 子 十九歳五ヶ月
 大分県土族 東京第五大区四小区
 浅草聖天町四十七番地住居 阿南鏡次郎母
 寄留 きく

合 拾人 内 [男五人 / 女五人]

右之通相違無之候也

明治九子年六月 池田秀之（印）
 （池田謙齋自筆）

(1) 小原 静 池田謙齋の門人、代診を勤める。
 明治20年より44年迄侍医局医員。明治18年
 頃竹井家の養子となり、竹井 静に改姓。

10 明治9年10月 日 (3456)
 記

元現米拾三石
 一、家禄金七拾八円五拾貳錢貳厘
 内 米壹石 禄税
 此金六円四錢

右は明治八年分より金禄ニ御改正書面之通相成候
 旨致敬承候、依て御受申候処如件

第一大区十三小区 浜丁壹丁目拾番地
 士族 池田謙齋

明治九年十月
 東京府権知事 楠本正隆殿
 （池田謙齋自筆）

(注) 明治8年9月7日米禄を金禄に改正した。

11 明治10年1月 日 (3444)
 医学修業履歴書

第壹大区十三小区 浜町壹丁目十番地
 士族 池田謙齋

一、文久二壬戌年旧幕府医学所え入塾⁽¹⁾修業罷在

候中、元^(ママ)治元甲子年旧幕府より被命長崎医学校
 え伝習ニ罷越、明治元戊辰年帰府開業、現今医学
 校え奉職中、明治三庚午年^(ママ)大政官よりプロイ
 セン国え留学被仰付、同七年八月中医大学卒業仕候
 ニ付、同九年五月中帰朝開業仕候、此段御届申上
 候、以上

(1) 幕府医学所入塾とは江戸の緒方洪庵塾に
 入ったことを指す。

(池田謙齋自筆下書き)

12 明治10年1月 日 (3442)
 (表書) 医学修業履歴書

第壹大区十三小区 浜町壹丁目十番地
 士族 池田謙齋

医学修業履歴書

第壹大区拾三小区 浜町壹丁目十番地
 士族 池田謙齋

一、文久二壬戌年旧幕府医学所え入塾修業罷在候
 中、元^(ママ)治元甲子年旧幕府より被命長崎医学校え
 伝習ニ罷越、明治元戊辰年帰府開業、現今東京医
 学校え奉職中、明治三庚午年^(ママ)大政官よりプロイ
 セン国え留学被仰付、同八乙亥年八月医学卒業仕
 候ニ付、同九丙子年五月帰朝開業仕候、此段御届
 申上候也

明治十丑年正月 池田謙齋（印）
 東京府権知事 楠本正隆殿

(池田謙齋自筆)

13 明治10年9月 (560)

拙者并相良玄貞⁽¹⁾普国留学中医務局より書籍買
 入御依頼ニ相成、右勘定結末判然いたし兼候ニ付
 勘定書相廻し候様御照会之趣致承知候、然ル処右
 勘定書え遣払受取書相添先年中同国伯林在留公使
 え届方依頼いたし差出候筈ニ付、猶御取調有之度
 候、尤心覚有之候丈々取調別紙ニ相記し差出し候
 也

十年九月 池田謙齋
 内務省衛生局 御中

(1) 相良玄貞 相良元貞。池田謙齋と共にドイ

ツ留学するも、病を得て明治8年5月帰国。同年10月死去。享年35。(1841-1875)。兄は相良知安。

14 明治11年 月 日 (3446)

(表書) 書類三通入り(この1行入沢達吉筆か)

履歴書之控

東京府士族 池田謙齋 秀之
(この1行ママ)
天保十三年十月廿五日

明治元年九月九日御雇ヲ以テ病院医師試補被仰付
○同元年十一月四日病院医師被仰付○同二年三月十一日六等官二等医学校医師被申付○同二年五月十四日は迄之職務被免、病院当直医官被仰付○同二年七月廿五日(ママ)任大学大助教○同二年十月十九日叙従七位○同二年十二月廿五日願之通父玄仲家督下賜○同三年四月九日兼任少典医○同三年六月廿五日叙正七位○同三年閏十月廿三日被免本官并兼官、同日普国留学被仰付○同七年五月被免留学、彼地ニテ私費留学○同七年十月廿二日陸軍省ヨリ普国留学被仰付○同九年五月十一日帰朝○同九年五月廿二日任陸軍々医監○同九年五月廿二日本病院出仕被仰付○同九年六月七日宮内省御用掛兼勤被仰付○同九年六月廿二日(ママ)兼補文部省四等出仕○同九年六月廿一日叙従五位○同九年十月廿八日兼任三等侍医兼文部省四等出仕如故○同九年十二月五日大和国并京都え御幸ニ付供奉被仰付○同十年一月十九日文部省御用掛兼勤被仰付○同十年二月廿二日京都供奉被免○同二月廿三日征討総督本営附被仰付○同七月廿五日還幸供奉被仰付○同四月十日東京大学医学部綜理之任ヲ被囑○同十月十二日被兼任二等侍医○同十一年一月卅一日叙勲四等

(池田謙齋自筆)

(注) 本履歴書には生年月日を始め記述月日にかんがりの誤りがある。これ以後3通の履歴書があるが、最後の履歴書に修正した年月日を記述する。

(別紙)

鹿兒島征討中九州地出張履歴控

一、二月廿三日大坂表征討惣督本営ニおいて征討惣督本営附被仰付、同廿四日惣督有栖宮(ママ)随同行西京出立、同廿六日福岡え上陸、四月四日迄同所病院在勤、同五日同所出立、久留米え着、九日迄同所病院在勤。十日高瀬え着、同廿日迄同所病院在勤、同廿一日より熊本病院在勤、五月五日より長崎病院在勤、六月十二日より熊本病院在勤、同十四日山縣参軍随従八代え出張、同廿一日大口え出張、同廿五日佐敷え帰り、同廿九日人吉え出張、加久藤・吉田辺順廻、七月十三日佐敷え帰る、同十二日(ママ)佐敷出立、大口・横川ヲ経、加治木え着、同十六日西京御用ニ付、同所同廿三日西京え着

(池田謙齋自筆)

15 明治13年6月2日 (3452)

私儀、脚気病院委員并内務省御用掛被仰付罷在候処、今般該病院之儀文部省管理相成候ニ付ては右御用掛御免被成下度、此段奉願候也

明治十三年六月二日 陸軍々医監兼一等侍医
内務省文部省御用掛
池田謙齋

内務卿 松方正義殿

16 明治17年9月9日 (1090)

退院願書

士族 池田謙齋長男 池田秀男⁽¹⁾

右者都合有之退院為致度候、此段願上候也

明治十七年九月九日

東京府神田区駿河台北甲賀町九番地

保証人 池田謙齋(印)

学習院長 谷干城殿

聞届候事(角印)

明治十七年九月十一日

(1) 池田秀男は医学留学の為明治18年11月14日ドイツへ赴く。年齢は14歳10ヶ月である。

17 明治23年 月 日 (3443)

東京府士族 旧静岡藩 正五位勲三等
新潟県越後国南蒲原郡西野新田

- 天保十二丑年十一月十日^(ママ)生 池田謙斎
 旧池田秀之
 明治元年（慶応四年）九月九日 御雇ヲ以テ病院医師試補被仰付 雇 軍務官
 同年十一月四日 病院医師被申付 同 同
 明治二年三月十一日 二等医学校医師病院掛 六等官 東京府
 同年五月十四日 病院当直医官被仰付 同 大学
 同年七月二十五日^(ママ) 任大助教右宣下候事 大学
 同年十月十九日^(ママ) 叙従七位
 明治三年四月十日 兼任少典医 宮内省
 同年六月十五日 叙正七位
 同年閏十月二十三日 被免本官并兼官普国留学被仰付 大学
 同六年^(ママ) 普国留学被免 文部省
 同七年十月二十二日 普国留学申付候事 陸軍省
 同九年五月十一日 プロイセン国ヨリ帰朝
 同年五月二十二日 任陸軍々医監本病院出仕被仰付 陸軍省
 同年六月七日 宮内省御用掛兼勤被仰付 宮内省
 同年六月二十一日 兼補文部省四等出仕
 同年六月二十七日 叙従五位
 同年十月二十八日 兼任三等侍医
 同九年十一月三十日 大和国并京都へ行幸供奉被仰付 宮内省
 同十年一月十九日 出仕官被廢候ニ付文部省御用掛兼勤被仰付候 (宮内省用箋)
 明治十年二月二十三日 征討総督本営附被仰付九州へ出張 征討総督本営 (池田謙齋自筆)
 同年七月二十五日 還幸供奉被仰付
 同年一月十九日 東京医学長ノ任ヲ被囑 文部省
 同年四月十日 東京大学医学部総理ノ任ヲ被囑 全
 同年十月十二日 兼二等侍医
 同十一年一月三十一日 勲四等ニ叙シ終身年 全
- 金百八十円下賜
 同年六月五日 脚気病院設立ニ付委員被仰付
 同年七月二日 内務省御用掛被仰付
 同年十二月十一日 兼任一等侍医
 同十二年七月十七日 中央衛生会委員被仰付
 同年十月廿三日 本病院出仕被免，軍医本部御用掛被仰付 陸軍省
 同年十二月十五日 叙正五位
 十三年六月十七日 御用有之上野国伊香保へ出張被仰付候
 十三年十二月三日 御用有之西京へ被差遣
 十四年九月十八日 御用有之西京表へ被差遣
 明治十五年十一月一日 叙勲三等賜旭日中經章
 十九年一月四日 東京大学御用掛り被仰付
 十九年二月五日 任侍医局長官兼侍医
 同年二月五日 勅任二等年俸四千円下賜
 同年十月廿八日 叙従四位
 二十年五月廿三日 明治二十年五月廿三日勅定ノ銀製黄綬章ヲ賜フ
 二十一年^(ママ)三月七日 医学博士ノ学位ヲ被授
 二十一年五月廿六日 叙勲二等
 二十二年七月 兼侍医局長，叙勅任官二等賜二級俸
 二十二年十一月 明治二十二年八月三日勅令第三百号ノ旨ニ依リ大日本帝国憲法発布記念章ヲ授与ス
 二十三年三月 京都市行啓供奉被仰付 宮内省
 二十三年四月 呉・佐世保両鎮守府及江田島海軍兵学校行幸供奉被仰付 宮内省
- 18 大正2年8月13日 (3441)
 大正二年八月十三日伊香保千明仁泉亭え宿泊，同九月三日マデ三週間滞在致し，休養ノ旨届 (池田謙齋自筆)
- 19 大正 年 月 日 (3445)
 (池田謙齋履歴書下書) (別筆)
 (包紙表書) 此書類も御一所に御しまひおき願

上候	入澤	十月廿三日	本病院出仕被免, 軍医本部御用掛被仰付	陸軍省
	(別筆・入澤達吉か)			
池田謙斎履歴		十二月十五日	叙正五位	
	(ママ)	同十四年六月	東京大学医学部総理ヲ免シ東京大学総理心得ニ任ズ	文部省
明治元年九月九日	御雇ヲ以テ病院医師試補被仰付			
	雇 軍務官			
十一月四日	病院医師被申付	同	同	
同二年三月十一日	任二等医学校医師			
	六等官 東京府			
五月十四日	病院当直医官被仰付			
	同 大学			
七月廿五日	任大助教	同		
十月十九日	叙従七位			
明治三年四月十日	兼任少典医			
	六月十五日	叙正七位		
明治三年十月廿三日	被免本官并兼官, 普国留学被仰付	大学		
同七年	普国留学被免	文部省		
同九年五月十一日	プロイセン国ヨリ帰朝			
五月廿二日	任陸軍々医監, 本病院出仕被仰付	陸軍省		
六月七日	宮内省御用掛兼勤被仰付			
六月廿一日	兼補文部省四等出仕			
六月廿七日	叙従五位			
十月廿八日	兼任三等侍医			
同十年一月十九日	出仕官被廃候ニ付文部省御用掛兼勤被仰付			
一月十九日	東京医学学校長ニ任ズ	文部省		
二月廿三日	征討総督本営附被仰付, 九州へ出張	陸軍省		
四月十日	東京大学医学部総理ニ任ズ	文部省		
十月十二日	兼任二等侍医			
同十一年一月三十一日	叙勲四等, 終身年金百八十円下賜			
六月五日	脚気病院設立ニ付委員被仰付			
七月二日	内務省御用掛被仰付			
十二月十一日	兼任一等侍医			
同十二年七月十七日	中央衛生会委員被仰付			
		十月廿三日	本病院出仕被免, 軍医本部御用掛被仰付	陸軍省
		十二月十五日	叙正五位	
		同十四年六月	東京大学医学部総理ヲ免シ東京大学総理心得ニ任ズ	文部省
		同十五年十一月一日	叙勲三等賜旭日中綬章	
		同十九年一月四日	文部省御用掛兼勤被免	
		同日	東京大学御用掛兼勤被仰付	
		明治十九年一月廿日	依願東京大学御用掛兼勤被免	
		二月四日	官制改革	
		二月五日	任侍医局長官兼侍医, 但二等勅任年俸四千円下賜候事	
		四月一日	後備軍軀員被仰付	
		十月廿八日	叙従四位	
		同廿一年三月七日	医学博士ノ学位ヲ被授	
		五月廿六日	叙勲二等	
		七月廿三日	官制改定	
		同日	兼任侍医局長, 叙勅任官二等賜二級俸	
		同廿四年十二月十六日	叙正四位	
		同 廿二日	賜一級俸	
		同廿六年一月廿六日	叙従三位	
		同廿七年九月八日	大本営広嶋ニ被進候ニ付供奉被仰付	
		同廿八年十月三十一日	叙勲一等授瑞宝章	
		同三十年十月十一日	叙一等賜一級俸	
		同三十一年二月二日	依願免本官并兼官	
		同日	依勲功授男爵	
		※大正四年十一月	授旭日大授章	
		大正七年四月三十日	叙正二位	
		五月一日	薨去	
			(荻窪アサヒ堂製用箋使用)	
		(注) ※は後日欄外に書き入れた項目。		
	(別紙)	池田謙斎履歴書		
	本貫	旧		
	族籍	藩		
	位勲			
	生国郡町村			

- 生年月日 天保十二年十一月十日生⁽¹⁾
 旧姓名 池田秀之
 姓名 池田謙齋
- 年号 月 日 任叙転免出張賞罰等〔辞令書アルモノハ／＼ノ欄内ニ記入ス〕資格 官衙
 （注 生年月日，旧姓名，姓名記入以外の文字は宮内省様式履歴書の印刷文字である）
- 明治元年九月九日 御雇ヲ以テ病院医師試補被仰付
 雇 軍務官
 十一月四日 病院医師被申付 // 同
 二年三月十一日 任二等医学校医師
 六等官 東京府
 五月十四日 病院当直医官被仰付
 同 大学
 七月二十五日⁽²⁾ 任大助教 同
 十月十九日⁽³⁾ 叙従七位
- 明治三年四月十日 兼任少典医
 六月十五日 叙正七位
 十月廿三日⁽⁴⁾ 被免本官并兼官，普国留学被仰付 大学
 七年 普国留学被免 文部省
 十月廿三日⁽⁵⁾ 普国留学被申付 陸軍省
- 九年五月十一日 プロイセン国ヨリ帰朝
 五月廿二日 任陸軍々医監，本病院出仕被仰付 陸軍省
 六月七日 宮内省御用掛兼勤被仰付
 // 廿一日 兼補文部省四等出仕
 // 廿七日 叙従五位
 十月廿八日 兼任三等侍医
 十一月卅日 大和国并ニ京都エ行幸供奉被仰付
- 十年一月十九日 出仕官被廢候ニ付文部省御用掛兼勤被仰付
 一月十九日 東京医学長ノ任ヲ被囑 文部省
 二月廿三日 征討総督本營附被仰付，九州へ出張 陸軍省
 四月十日 東京大学医学部総理ノ任ヲ被囑 文部省
 七月廿五日 還幸供奉被仰付 宮内省
 十月十二日 兼任二等侍医
- 十一年一月三十一日 叙勲四等，終身年金百八拾円下賜
 六月五日 脚気病院設立ニ付委員被仰付
 七月二日 内務省御用掛被仰付
 十二月十一日 兼任一等侍医
 十二年七月十七日 中央衛生会委員被仰付
 十月廿二日⁽⁶⁾ 本病院出仕被免，軍医本部御用掛被仰付 陸軍省
 十二月十五日 叙正五位
 十三年六月十七日 御用有之上野国伊香保へ出張被仰付
 十三年十二月三日 御用有之西京へ被差遣
 ※十四年六月⁽⁷⁾ 東京大学医学部総理ヲ免シ
 東京大学総理心得ニ任ズ
 十四年九月十八日 御用有之西京へ被差遣
 十五年十一月一日 叙勲三等賜旭日中綬章
 十七年七月二日 御用有之伊豆熱海表へ被差遣
 十九年一月四日 文部省御用掛兼勤被免
 同日 東京大学御用掛兼勤被仰付
 同廿日 依願東京大学御用掛兼勤被免
 二月四日 官制改革
 // 五日 任侍医局長官兼侍医
 但二等勅任，年俸四千円下賜候事
 四月一日 後備軍駆員被仰付
 十月廿八日 叙従四位
- 二十年十二月廿七日 愛国ノ表情ヲ表陳シ防海ノ事業ヲ賛成シ，金壺千円献納ス，依テ明治二十年勅定ノ銀製黄綬褒章ヲ賜ヒ茲ニ之ヲ表彰ス
- 廿一年三月七日⁽⁸⁾ 医学博士ノ学位ヲ被授
 五月廿六日 叙勲二等
 廿二年七月廿三日 官制改定
 同日 兼任侍医局長，叙勅任官二等賜二級俸
 十一月 大日本帝国憲法発布記念章ヲ授ラル
- 廿三年三月 京都市幸啓供奉被仰付
 四月 呉・佐世保兩鎮守府及江田島海軍兵学校行幸供奉被仰付
 七月三日 明治十五年八月東京神田区虎列拉予防費トシテ金二十五円寄

附、木杯一個下賜 賞勲局
 十月廿二日 茨城県下行幸行啓供奉被仰付
 廿四年五月十一日 御用有之京都へ被差遣
 八月十三日 富美宮拜診御用被仰付
 廿四年十月廿四日 神奈川県下行幸供奉被仰付
 十二月十六日 叙正四位
 同廿二日 賜一級俸，高等官二等，三千五百円
 廿五年十月廿一日 栃木県下行幸供奉被仰付
 八月十六日 静岡・神奈川両県下へ被差遣
 廿六年一月廿六日 特旨ヲ以テ位一級ヲ被進
 同日 叙従三位
 同日 群馬県下行幸供奉仰セ付ラル
 廿七年九月八日 大本営広島ニ被進候ニ付供奉被仰付
 廿八年十月卅一日 叙勲一等授瑞宝章
 三十年四月 京行幸啓供奉被仰付
 十月十一日 叙一等賜一級俸
 三十一年二月二日 依願免本官并兼官
 同日 依勲功授男爵
 ※大正四年十一月⁽⁹⁾ 授旭日大授章
 大正七年四月三十日 叙正二位
 五月一日⁽¹⁰⁾ 薨去
 (宮内省用箋使用)

(注1) ※は後日欄外に書き加えられた項目。

(注2) 年月日の修正は官庁辞令，及び『明治天皇の侍医 池田謙齋』の年譜に基づいた。

- (1) 天保12年11月1日生。
- (2) 明治2年7月27日。
- (3) 明治2年10月10日。
- (4) 明治3年閏10月23日。
- (5) 本記述は抹消されているが，正しい記述であり，抹消の理由は不明。
- (6) 明治12年10月23日。
- (7) 明治14年7月6日。
- (8) 明治21年5月7日。
- (9) 大正4年12月1日。
- (10) 大正7年4月30日。

(注3) 包紙に入っている2通の履歴書の内，前の1通は市販用箋に毛筆で書いた下書きであ

り，後の1通は宮内省の履歴書様式にペンで書かれたもので，執筆者は別人である。これには前書執筆者より挿入事項の書き入れがある。従ってこの宮内省提出の履歴書も下書きである。この経歴書は明治政府任官以降の池田謙齋の履歴であるが，それ以前の履歴を参考までに記す。

池田謙齋は天保12年(1841)11月1日越後国蒲原郡西野新田に里正(庄屋)入澤健藏・母はまの次男として生まれる。幼名は圭助，後健輔と改名。安政5年(1858)3月修学の為江戸に出る。文久3年(1863)2月20日江戸の緒方洪庵塾に入門。同年緒方洪庵の養子となり，続いて幕府奥詰医師池田多仲(玄仲)の養嗣子となる。同年11月14日幕命により長崎へ医学修学の為派遣される。以後は本書冒頭に記された履歴(B官庁届書類・履歴書1[3447])に繋がる。池田謙齋は農民の出身でありながら明治天皇の侍医(局長)になり得たのは緒方洪庵の妻八重子の斡旋で幕府奥詰医師池田多仲の養嗣子になったことが最大の要因である。但しこの時池田謙齋が長崎留学を養嗣子になる条件とした点も見逃せない。

[主要参考文献]

- 朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社 1994年11月30日発行
 池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙齋』上・下巻 思文閣出版 2007年2月25日発行
 霞会館諸家資料調査委員会編『昭和新修華族家系大成』上・下巻 吉川弘文館 1984年4月10日発行
 発行人 高崎斐子・安倍恭子・安倍信愛『明治天皇の侍医池田謙齋』さっぽろ いづみ企画編集 1991年7月31日発行

後記

1989年日本医史学雑誌第35巻第3号(平成元年7月発行)より資料として池田文書の研究(1)を発表して来たが，主要書簡の紹介が終わった為今回(64)を以て閉じる。まだ解説済み未発表のものは，①池田多仲が書き写した幕府の第1次，第2次長州征伐に係る達し書等約50通，②経歴

不明の人々の書簡約430通、③池田謙齋の子供・親戚達の手紙約100通、④池田謙齋の実家入澤家の父母弟姉妹・親戚達の手紙約180通が残っている。その全解説書簡目録は順天堂大学医学部医史学研究室にある。その書簡総数は3688通で、全解説文は整理中。その他未解説として池田家の多数の買い物領収書、内務省の印刷物（各県警察より県知事宛の医師犯罪記録）等がある。

解説済み未発表の書簡のうち1通を資料として書き残す。

それは明治3年9月28日付池田謙齋の実父健蔵が謙齋に宛てた書簡である。

明治3年9月28日 (398)

✂

(端裏書) 池田少典医様 池田宅より

✂

私義、板橋駅橋邊にて御待申居候、兼て御申合之通御用筋御取込にて御昼時分迄御光り(ん)無御座候得共出立いたし候、生涯御面会納ニ付御精勤ニ候得は無此上安心仕居候、何事も後便之節と略候、以上

九月廿八日 入沢健蔵
池田謙齋様へ

池田謙齋ドイツ留学の辞令は明治3年閏10月23日であるが、既に内示があったようで謙齋の父親健蔵(61歳)は越後が雪になる前に別れを告げるべく出府し、最後の別れに逢えなかった心残りの想いを手紙に託している。その後池田謙齋は11年8月より11月迄明治天皇北陸・東海巡幸に

随行した時に父親健蔵と逢ったと思われる。父親健蔵は13年1月11日死去した。享年71。(1810-1880)

池田文書は池田謙齋の曾孫池田允彦^{まさひこ}より提供されたもので、その解説は1986年(昭和61年)7月より始まり2012年(平成24年)7月に終わった。26年の間参加したメンバーに出入りがあるが、酒井シヅ(主宰者)、網野 豊、伊藤 隆、岩崎鐵志、遠藤正治、大塚恭男、蔵方宏昌、小林久子、斎藤美栄子、齊藤陽子、酒井 豊、佐藤昌介、佐藤ミホ子、須永 忠、田中球子、寺崎昌男、中城民夫、中野 實、中山 茂、深瀬泰旦、矢部一郎、吉田 忠の諸氏により解説された。その解説文は本誌の外に『東大医学部初代総理池田謙齋』上・下巻(編者代表 酒井シヅ [株]思文閣出版 2006年2月25日)があるが、この中には池田謙齋のドイツ留学時代の書簡はない。その書簡は池田謙齋の次男 次郎の養子先安部男爵家に残され、『明治天皇の侍医 池田謙齋』(発行人 高崎斐子・安倍恭子・安倍信愛 企画編集さっぽろ いづみ)に25通あり、その他岩倉具視、木戸孝允よりの書簡、池田謙齋の3女高崎斐子^{あやこ}の「父謙齋の思い出」などが収録されている。

尚池田文書及び池田謙齋のドイツ留学時の書簡原文は順天堂大学医学部医史学研究室に預託されている。

池田文書の研究(33)より(64)迄の解説文校正・編集は池田文書研究会会員 須永忠・斎藤美栄子が担当した。

(終)